

第3回ひがしおおさか地方創生ラウンドテーブル	
日時:令和6年12月22日(日)	場所:本庁舎18 階
参加者:市民委員39名、構想日本・コーディネーター、市・事務局	
コーディネーター：A 班 構想日本 総括ディレクター 伊藤 伸 B 班 構想日本 シニアフェロー 定野 司 構想日本 フェロー 柏崎 亮太 ナビゲーター(A 班):株式会社あおいけあ代表取締役 加藤 忠相 ナビゲーター(B 班):構想日本 シニアフェロー 定野 司	
議事要旨: 1. 開会 2. ナビゲーター講演	<省略>
3. グループワーク	
A 班 コーディネーター: 今回初めて参加された方から自己紹介をいただく。 委員 A-6: 父は今、高齢者施設に入居中。心臓の手術があり、術後のリハビリで心肺機能上げる必要があったにも関わらず、コロナ禍真っ只中で、部屋から出ることは禁止されていた。今となっては食堂でご飯を食べたら、そのまま自分の部屋で寝る、を繰り返した生活を送っている。そういう意味では加藤さんの施設は恵まれていると思ったし、加藤さんのような考えを持つ方に出会えていたら、と思う。今回の話を聞いて、自分にできることは何だろう、と感じた。弟が30年前に交通事故で寝たきりになった。当時ヘルパーの数は少なく、両親が自宅で介護し、3年前に肺炎で亡くなった。自分自身は物流関係の仕事をしているが、来年3月で定年を迎える。そのタイミングで、ずっと考えていた障害者関係の仕事をやりたいと思っている。今回の加藤さんの話を聞いて、すごく難しいと分かっているが、挑戦してみたいと思った。何もやらないより、やって失敗してもう一度リスタートした方がいい。どこまでできるのか分からないが前に進んでいきたい。 若いうちはまだいいが、高齢で障害のある方、特に知的の方は認知症の方と同じくらい排斥されている感覚がある。何か手伝えることはないのか。今回本当にいい経験をさせてもらった。また、お知恵を借りる機会があれば、お借りしたい。	

委員 A-7:

発達障害の子どもがいる。同じような子どもを持つ母親たちと集まって話をすると、「誰かが守ってくれるわけではない。」「同じような子どもたちが集まって一緒に住める場所を作りたい」といった話にいつも行き着く。過去には障害児を受け入れていた施設が、利用者が高齢して引き続きで利用しているため、今いる障害児が入れない、といったこともある。親が障害を持つ子どもを見ることができなくなったとき、もしくは子どもが社会に出られなかったときに見てもらえる施設を調べているなかで、「あおいけあ」を知った。

東大阪市にも、全く同じではないが似た施設があり、子どもも利用させてもらったことがある。加藤さんの施設ほどではないが、土曜日にはデイサービスを利用している高齢者がお祭りを開いてくれ、子どもたちが参加している。私の両親は50代なので、子どもは高齢者と関わる機会がなかった。お祭りを通して、おじいちゃん・おばあちゃんにコマまわしやお手玉を教えてもらい、とても喜んでいた。こういった関わりは大切だと感じた。

最近、学校行事に参加して疑問に思ったことがあった。韓国の先生が来てキムチ作りをするといった授業だった。これ自体を否定するわけではないが、今の子どもたちはそもそも日本の漬物の漬け方も知らないのではないか、と思った。日本食をずっと作ってきた高齢者の方に漬物の漬け方を教えてもらう、あるいはけん玉やコマまわしの遊び方を授業の一環で教えてもらえたら、どれだけ良いかと感じた。高齢者が持つ技術を子どもたちに伝えてもらいたい。

ナビゲーター:

「自立支援」という言葉が嫌い。「自立」とは何かを考えたとき、熊谷 晋一郎先生の「自立とは依存先を増やすこと」という言葉が一番しっくりくる。「自分で何でもできること」ではない。障害のある子どもとその保護者はしっかりと紐で繋がっていて、保護者はこの紐が切れたら(自分が亡くなったら)、子どもは死んでしまう、と心配されている。それは自立している状態とは言えない。細くても短くても、たくさんの糸や紐が地域の中にたくさんあって、その中の一本がたとえ切れても死なない状況が「自立」だと思っている。それは他の子どもも高齢者も同じ。地域の中で紐を結んでいく場所をつくるのが一番の自立である。ここにいる方の多くは自分を健常者だと思って生きていると思う。でも健常者というのは、たまたまその社会の多数派にいるから健常者であるだけ。偶然時代や環境に合っているから障害ではないということ。この先4分の1が認知症になる。もうマイノリティーではなくマジョリティー。認知症の方は保護される対象、可哀想ということではなく、認知症であっても平気な環境をつくるのが社会。

きっと考えれば考えるだけ色んなことができると思う。お母さんたちだけで頑張るのではなく、今日来ている皆さんも含めて、何ができるのか考えていくことが広まればいい。

委員 A-19:

父は特別養護老人ホームに入所し、3年ほどお世話になって93歳で亡くなった。週に1～2回は施設に行き、父の状況を聞き、場合によっては相談し改善してもらうこともあった。父が亡くなる1週間前にここでの暮らしはどうだったか尋ねると、「みんなようしてくれた。楽しかった。」と聞いたとき、働いていて叶わなかったが、私が世話できればよかったと思った。

きっと90%以上の高齢者施設は加藤さんのところとは違う形で進めているものと思うが、やはり今日の話聞いて、素晴らしいと思った。子どもとの関わりも両立されている。現状厳しい部分もあると思うが、子どもとの関わりを考えると、加藤さんが進めておられるような施設がどんどん広がっていけばいいなと思った。

コーディネーター:

以前の回で、小学生の時にはあった高齢者の方の読み聞かせが、中学校に上がってからなくなり、高齢者とのつながりが全くなかったとの話を聞いた。今日の加藤さんの取り組みを聞いて、もしこのような場があればどう思うか。

委員 A-22:

高齢者との関わりがあるだけで、できることはたくさん増え、楽しくなると思った。

コーディネーター:

加藤さん、あの環境の中に小中学生はいるのか。

ナビゲーター:

当たり前にいる。日常的に来ている。施設のイベントでおばあちゃんたちが商品を作って売る事があるが、お店を開くと子ども達が手伝いにくる。おじいちゃんたちが作ったじゃがいもを1個いくらにするか、店名はどうするか、どうすれば売れるかを子どもたちが考えてくれていた。

次の年はおじいちゃんやおばあちゃんの店を手伝わず、自分たちで商品などを考えてお店を開いた。

私たちが学校でイベントポスターを貼るとなると教育委員会を通す等大変。子どもたちであれば校内に勝手にポスターを貼り始め、先生にも案内して実際に来てもらったこともある。子どもたちは色んなものを超えていく。

コーディネーター:

地域の方も同じなのか。

ナビゲーター：

お祭りは単なる呼び水。ここに施設があり、ここに来ても怒られない、普通に遊んでもいい・集まってもいい場所であると、知らせるためのもの。普段カードゲームなどして遊んでいる。

委員 A-27：

高齢者に対しての考え方が変わった。今まで高齢者に対しては、一方的に若い世代が何かを与えていただけたと思っていた。それが地域と密着することで、お互いに得のある関係になっている。こういった地域とのつながりは、高齢者のフレイル防止につながるのですごく良いなと思った。フリースペースの説明もあったが、前回のラウンドテーブルで話題になった「勉強する場所がない」といった子どもの問題も解決するので、すごくいい。

コーディネーター：

前回、市内に若い人が勉強する場所がない、という話が出た。図書館は時間やブース制限があり、スーパー等で勉強すると注意されることも。学校も授業が終われば、早く帰らなければならない。そういう中で、先ほどのフリースペースはまさにその部分を解決できる。

ナビゲーター：

この数年間で富山や会津等、全国に何ヶ所かつくるお手伝いをしてきた。Wi-Fi を飛ばして、コンセントがあるだけで、若い人たちは集まってくる。居場所として何か特別なことはいらない。スペースを少し広めに用意するだけで、放課後子どもたちのたまり場になる。ファミレスのように 100 円くらいで飲み物を飲むようにしておくと、集まってくる。何かルールづけをするのではなく、当たり前になれる場所としてつくると面白い。

委員 A-1：

認知症になれば施設に入れられると、マイナスな印象を持っていた。ニュースを見ていても、年老いていくのは嫌だなと思うことが増えていた。今の話を聞いて、高齢者が教えてくれることが、次の世代に繋がっていくと思うと、そのような機会をもっと増やしていくことが大事だと思った。

コーディネーター：

加藤さんの「高齢者に楽しんでもらうのではなく、高齢者が楽しむ」と聞くと、確かにそうだなと思う。先ほどもあったように、今まで他のところでやってきていることは、どちらかというと「高齢者に何かしないといけない」、「高齢者に楽しんでもらわないといけない」というものがあると感じている。その発想の転換は実際にやろうと思うと、結構大変なのか。加藤さんからすれば当然のことか。

ナビゲーター：

10年ほど前に国立社会保障・人口問題研究所の西村周三さんと一緒に講演する機会があった際、人口統計グラフを見て愕然とした。明日から人口が変わらず維持され、子どもたくさん生まれ、経済成長が続く社会が保障されていれば、ここまで躍起になって考える必要は全くないと思っている。今平均寿命は男性が80歳、女性が87歳。でもこれは誕生時の平均寿命なので、皆さんくらいまで生きると、今一番亡くなっているのは男性が88歳、女性は93歳。今の85歳の41%が認知症。90歳になると61%が認知症。95歳は82%が認知症。つまり90歳を超えると認知症じゃない方がマイノリティー。自分が必ず認知症にはならないと言い切れる人はいないはず。

子どもたちが、年をとれば認知症なんて当たり前だと思える環境をつくれるといい。良い環境と良いケアがあれば、認知症の方はただのおじいちゃんとおばあちゃん。困っていなければただのおじいちゃんとおばあちゃん。困らせる環境をつくってしまったのが原因。

頭の中にデイサービスを想像してほしい。多分綺麗で天井が高くて明るくて、テーブルも椅子も新品で花が飾っている。今デイサービスの提供時間は7時間が主流。頭の中に描いたデイサービスに7時間座っていられるか。ケアマネージャーに週3日どうかと言われ、喜んで行くか。カフェでも7時間座っているのはなかなか難しい。本やゲーム機を持ち込めば何とかいられる時間。健康な私たちがいるのも嫌だと思うのに、なぜ、足も腰も痛くて、認知症で色んなことが不安でしょうがないのに7時間座っていられると思うのか。「帰りたい」と言えば、「帰宅願望あり」と記録され、歩き始めると「徘徊」と判断される。おじいちゃんやおばあちゃんが何か間違ったことを言っているのか。ごく当たり前のことを要求しているだけなのに、認知症だからしょうがない、ではないはず。

私たちや子どもたちが平気で7時間いられる環境はどういったところなのか。そして認知症で困っている方が、困らない環境にするにはどうしたら良いのか。そのシンプルな2つを考えるだけで、「認知症のおじいちゃんやおばあちゃん」は「普通のおじいちゃんとおばあちゃん」になる。

そういった状況を子どもたちが見て、年を取ればどんなところで困るのかわかってくれる環境を地域の中にたくさんつくっていくことが大事だと思う。

マジョリティーやマイノリティーは勝手に行政が作っているだけで、線の引き方で変わる。多分皆さん自分は普通だと思って生きているはず。でも普通って何だろう。健康も同様。振れ幅は絶対あるはず。それが取り繕えるのか、取り繕えないかだけの差だと思っている。障害も同じ。知らないと怖いのは当然。それを無理やり分けて考えがち。

コーディネーター：

市としての取り組みなど、事務局からどうか。

事務局：

地域交流スペースを設けている施設は多く、東大阪市にもある。その中で地域に向けたお祭りやイベントをされているところも多い。すべてを把握しているわけではないが、どちらかという対象者は子どもをはじめとした地域の方であり、入所者と一緒という感じではないかと思われる。入所者まで参加するというより、地域に施設を知っていただく、もしくは施設の入所者や利用者を楽しんでいただくためのイベントが多いイメージである。高齢者施設の中には、子ども食堂を運営されているところもある。認知症の方が給仕をしている事例はあるが、準備まで当事者が関わるような事例はないかと思う。今話を聞いて、発想の切り替えや準備が必要だと思った。サービスを受ける側とされる高齢者が、イベントを企画し開催するというのは、マルシェのような感じで楽しそう。高齢者のウェルビーイングについて地域の事業所の皆さんにどのように伝えていくかが、東大阪市の課題だと思う。

コーディネーター：

こういった場はどうすればつくっていいのか。東大阪市で、高齢者が楽しめてかつ、色んなものがごちゃまぜになっている場はどうすればできるのか。

委員 A-10：

今日のお話、大変感動した。祖母は認知症になって、10年以上病院で過ごして亡くなった。自分が同じ立場ならそれを望むのかと言われると、そうではないと思う。私は大阪市内で LGBT の居場所づくりを行っている。ただ、緑や広場があって、子どもたちが行き交うような広さはない。公共に開かれたスペースの広さがとても良いと思った。東大阪で考えたとき、府営住宅の敷地内に公園のようなものがあると思うが、それは使えないだろうか。緑があって、ある程度スペースのある場所は、きっと探したらあるのかもしれないが、うちの近所では正直思い浮かばない。

コーディネーター：

確かに公営住宅であれば、大体公園や集会所を持っているので活用できるかもしれない。ただ、府営住宅だと、なかなか東大阪市で行うのは難しいかもしれない。UR はあるか。

事務局：

1ヶ所ある。団地としては大規模。

コーディネーター：

先ほどの加藤さんのお話の中でアパートが出てきた。若い人の家賃を半額にする代わりに、高齢者への声かけをお願いしているとのことだが、この部分については、同じような取り組みをしている自治体が他に

もある。例えば、愛知県豊明市では、UR の団地が古くてエレベーターがないため、上の階が空室になっていた。そこで、従来の部屋をリフォームし、市内の藤田保健衛生大学の学生を対象に、半額助成を行った。半額助成の代わりに自治会や祭り等のイベントには必ず参加することをお願いした。藤田保健衛生大学の学生は多くが看護師や保健師をめざしており、高齢者との関わりが自分の勉強にもなっていると聞く。そこから UR の1階に「まちの保健室」が出来上がり、学生が出入りすることで交流の場が生まれている。それぞれがやりたいと思うことを形にできるかどうかが大きいかもかもしれない。

委員 A-23:

話を聞き、大きな家族のようなコミュニティが形成されていると思った。近所のリージョンセンター周辺に高齢者や子どもが集まっている姿を見かける。近隣の小学校で高齢者がフリーマーケットをしていたり、コマ回しを教えてくれるといったお祭りがあったので、子どもが小さい頃は参加していたことを思い出した。高齢者の方は楽しみにされているようだった。実際に色んな世代の方が交流できる機会はあるかと思うので、そういったことを地域に知らせる機会や、我々も情報を集め、子どもに教えて参加させることができるといい。積極的に参加していくアンテナを張ることも大事だと思った。

委員 A-5:

話を聞いて、高齢者に対して今までとは異なる視点を持てた。他の交流のしかたがあるのでは、と考えることもできた。地域の高齢者と交流を持つことは少ないが、声かけや挨拶からでも交流していきたいと思った。

コーディネーター:

前回も「挨拶」は話題になった。幼いとき、知らない人に声をかけられたら、返事をしないように教えられる。でも地域においては、挨拶が必要。いかにして関係性を築けるかだと思う。あおいけあは家族みみたいな雰囲気をイメージしたらいいか。

ナビゲーター:

「挨拶しなさい」とは言わない。若い人たちも声をかけたいけど、声をかけたら不審に思われるのでは、とってしまう。お互いに声をかけてもいい環境があると、意外に声をかけやすい。そこから広がっていくこともある。高齢者も若い人たちもやりたい人はたくさんいる。その場がないのが多分一番の問題。

委員 A-13:

今日の話を聞いた中で、一番のキーワードは「施設の高齢者を楽しませるのではなく、楽しんでもらうこと」だと思うが、今ほとんどの施設は発想が逆。地元の施設の友の会に入って、年に何度か行事があつて

訪れるが、施設の利用者と接することはない。地域の方を招いて楽しんでもらう・理解してもらって協力してもらうことが主になっている。今日話を聞いて、そうではいけないと思った。以前は3世代同居が自然で、高齢者がいることは当たり前だった。老いていくこと、亡くなることは自然なことだった。加藤さんの施設は今もそういったことが日常になっている。日頃からの世代を隔てない接触が大事だと思う。市内にはたくさんの施設がある。難しいとは思いますが、まずは発想を転換してもらうことが大切。前回、中高生の放課後の居場所が話題になった。今介護施設は各地区にあるので、施設の中の部屋を開放してもらうのが一番良いのかなと思う。ただ、経営のこともあり、施設側の発想を変えてもらうのは難しい。ここが一番の問題だと思う。

先ほど UR の話があったが、市内には市営住宅もある。老朽化しつつあり、空き部屋が多い印象を持っている。市営住宅であれば、市のなかで進めることができるのでは。

コーディネーター：

周りの施設からの批判や指摘はあったのか。

ナビゲーター：

あまりない。特殊なことをやっているわけではない。介護保険の当たり前のことをやっているだけ。新規の事業所参入は今難しくなっている。(一部の自治体では5年以上の経営経験がないと、参入できない。)若くてやる気のある人たちがチャレンジできる体制・方法がないと変わってはいかない。市民がそういったことを壊していきながら、自治体と話をしていく必要がある。

委員 A-21：

今日話を聞いていて、子どもがいないので、明日は我が身と感じた。

同時に生きづらい世の中になってしまった、とも感じた。自分が若い頃は3世代・4世代家族が当たり前で、高齢者との交流は日常であった。なぜ若い人にも高齢者にも、遠慮しないといけなくなったのか。

テレビで、ある自治体が月に2・3回程度、高校生や大学生がバイト感覚で高齢者にスマホの使い方を教える機会をつくっている様子を見たが、若い人たちが結構集まっていた。そういったことも1つの手ではないか。私は子どもが好きなので、コミュニケーションを取りたいと思うが、できる場がない。それに遠慮してしまう。そういうことがなくなるといい。

コーディネーター：

どうすれば、気軽に若い人と話ができる雰囲気になると思うか。

委員 A-21:

「この人は安全」と見て分かるような腕章があればいい。

ナビゲーター:

逆に若い人たちは今の意見に対して、どうすれば安心して話せるのか聞いてみたい。

委員 A-24:

私自身は小さいときから祖父母と遊んだり、教えてもらうことが多かった。話をすることに抵抗感はない。

委員 A-21:

そういう方を見分けられたらいい。「老害」という言葉が流行っているが、そう思われたくない。

委員 A-7:

前回もこの話はあったが、自身が PTA をしている学校には腕章があって、学校が地域の方に渡している。放課後、公園を歩くときにその腕章をつけることで、子どもたちを見守っていると周りに知らしめることができる。ももとは地域の方がやってくれていたが、協力してくれる方が少なく、今は全保護者にその腕章が配られ、自転車に貼る用のシールも配布されている。

ただ、こういったことは学校に行かないと、そんなシステムがあることすら分からない。自治会に加入しない人も増えてきているなか、どう周知していくべきか。

この腕章は愛ガードができない人も着用することができる。腕章を付けている人が歩いているエリアは見守られている地域となり、防犯につながっている。学校としては、その方の素性が分からないと難しいので、手当たり次第に配布は厳しい。

コーディネーター:

千葉県習志野市でも似た取り組みを行っている。そこは、自治会に加入している・していないに関わらず、全員に腕章を配っている。地域全員が腕章を着用することで、着用していない人がいたら、「この人大丈夫なのか？」と思えるようにしたい、という学校長の考えだったと聞く。その学校はいわゆる「コミュニティースクール」であり、保護者や PTA 以外にも学校に来てほしいとお願いしている。地域の方が自由に出入りすることにより、休み時間に高齢者と会話をしたり、教えてもらえる場を作った。最初のうちは、子どもがいる保護者が出入りするだけだったが、今となっては関係なく地域の方が出入りしている。これも発想の転換。

ナビゲーター：

海外の考え方で children to children というものがあり、国内でも実践されている事例がある。防災の一環として、子どもたちがハザードマップに手紙を添えて、高齢者宅に届けるというもの。民生委員が配布するとそのまま捨てられてしまうこともあるが、子どもたちが手書きで書いてくれたものだとかちゃんと受け取ってくれる。どうしても大人側から何かやってあげようといった発想になりがちだが、子どもたちの力を貸してもらうという発想もいいと思う。

委員 A-11：

お話のあった施設があれば、自分も入ってみたいと思った。高齢者施設は「今までできていたことができなくなった人が預けられてしまう場所」といったイメージが強くある。どうすればイメージが変わるのか。83歳の母と2人で暮らしている。できることは自身でやってもらいながら、できない部分はカバーしている。母は手芸が得意なので、なるべく手先を動かしてもらって脳の活性化を図っている。手作りしたものを人にあげて喜んでもらえると、母の自信になっている。一歩踏み出すのに勇気は必要だが、得意なことを人に教えてあげる等を通して、生きがいを見つけてもらえたらと思っている。

コーディネーター：

高齢者と接する機会があるか。どうすれば接する機会が増えるか。

委員 A-12：

祖父母がすでに亡くなり、高齢者と接する機会がほとんどない。小学生の頃は祖父母が住むマンションに老人クラブがあり、友達と一緒に参加して折り紙やコマ回し、けん玉を高齢者に教えてもらった。カラオケにも一緒に行き、古い歌も教わった。色んな楽しい経験ができたと思っている。図書館でも小さな会議スペースでもいいので、全く接点のない人たちが話せる環境があればいい。

委員 A-9：

ほとんどの施設であれば、介護士は仕事としておじいちゃん・おばあちゃんに接し、おじいちゃん・おばあちゃんはお金を払ってサービスを受けているので、精神的な距離が生まれるが、加藤さんの施設はその距離が近くて、お互いがお互いをサポートできるような関係だと感じた。したくないことを仕事にしている人が多い中、やりたいことを仕事にできるのは理想的。その方が長続きする。幸福度にもつながっている。私自身、今社会とつながっていられるのは仕事をしているから。働けなくなったらどうなるのか。そう考えると、加藤さんの施設は羨ましい。参加できれば楽しいだろうし、実りがあると感じた。

コーディネーター：

加藤さんの施設には、「何かしたい」と思っている人が集まっている。それは、仕組みをつくったから実現できているのか。それともそういう人がいるから実現できているのか。

ナビゲーター：

後者だと思う。インターンで介護士を志す学生がよく来ているが、志望動機を聞くと、「おじいちゃん・おばあちゃんが好きだから」もしくは「人の役に立ちたいから」と答える学生ばかり。そんな若者たちがなぜ2、3年でやめてしまうのか。それは介護の現場がその理想とは異なっているから。ハンナ・アーレントは「働く」には3つあると言っている。1つは労働、1つは仕事、1つは活動。「労働」は嫌な仕事でも、対価をもらい余暇を楽しむために働くこと。「仕事」は自分たちの毎日が誰かの役に立っている、未来の子どもたちに何かを残すといったことを理解しながら働くこと。「活動」はお金にならなくても自分がやりたくて働くこと。業務が分断されてしまうと、自分の仕事に誇りが持てなくなる。何のためにやっているのか分からなくなってしまう。多分市役所の中でも分断は起こっていると思う。今日のラウンドテーブルの場に、例えば住宅関係の部署や防災関係の部署の方がいれば、もっと面白くなるはず。そういった感覚もいつの間にか固定化されてしまっている。今後どうやっていくのか、どう生きていくのか、そこを逆算して考えていくことが大事。

コーディネーター：

加藤さんの考えを踏襲できる人が場をつくることはできるはず。

ナビゲーター：

神奈川大学では市営住宅の一部をサッカー部の寮として借りている。安く住める代わりに、おじいちゃん・おばあちゃんの手伝いをしたり、スマホ教室を開くなどの活動をしてきている。自治体として若者を支援することが、結果的に高齢者のためになっている、一挙両得のような取り組みができると良い。イノベーションは1つの分野の人間だけだと、どれだけ一生懸命考えても生まれない。異なる分野の人と話をし、てやっとなまれるもの。

この会議は属性の異なる方が集まっている。人の話を聞いて、こんなことができるのでは、といったアイデアがたくさん出てくるといい。行政からも色んな属性の職員が参加している。

委員 A-6：

市内には多くの大学がある。市営住宅に関わらず、住宅も数多くある。そこを上手く活用できれば。

加藤さんは25年やってきているが、一番しんどかったのは行政の壁ではないか。行政としても、認可等の面で縛りを設けないといけない部分はどうしてもあると思う。精査は大変かと思うが、志の高い方々を行政がしっかりと支援していくことによって、加藤さんのような事業所は間違いなく増えていくと思う。一方で高齢者施設が増えすぎている地域もある。その部分は規制も必要ではないか。

ナビゲーター:

実際によくやっているのは、行政の他の課に相談しに行くこと。担当課と話しても埒が明かないことも、違う課であれば上手くいくケースはある。

事務局:

まさしくそのような場として、このラウンドテーブルがある。昨年度もラウンドテーブルでもらった意見を各所属に共有している。行政としては、どうしても法律や市民の安全・安心を守らなければならない。昨年度は企画課のみであったが、今年は子ども家庭課や地域福祉課も事務局に入ってもらっている。従来からある法律、安全・安心とのバランスを取りながら、違う切り口で皆さんの意見を何とか形にしていく作業を進めたい。

また、大学での事例としては、近畿大学ではフリースペースを学生が運営しており、地域の方が利用できるようになっている。大阪商業大学であれば、ゼミの一環として高齢者向けのスマホ教室を開催していると聞く。マンパワーの問題があり、全市的な取り組みではないため、皆さんにあまり見えていないのかもしれない。

コーディネーター:

すべてのことをすべての市民が知ることは不可能。今のような事例が少しずつでも増えていけばいい。東大阪市は、子どもファーストなまちをめざすため、子ども関係の部局だけでなく、全部局の部長級で構成される「子どもファースト推進本部」を立ち上げた。とても特徴的で、縦割りをなくそうとしている。

委員 A-8:

私の祖母は認知症で、すぐに話したことを忘れてしまい、何度も同じことを聞いてくる。それでも何かをしてあげたい、という気持ちは溢れていて、「人の世話をするうちが華」とずっと言っている。そういう方は多いと思う。東大阪市は商店街がそこそこ多い。でも空き店舗も多い。色んな機能が揃っているのが商店街。そこに住む場所ができれば便利。地域と関われる場所がくれたらいい、と思う。

先ほどの腕章の話だが、腕章は少しハードルが高いように感じている。違和感なく着用できるもので、思いついたのはマスク。マスクは着用している人が多いので、マスクに装着できるワンポイントがあれば、見分けが付きやすいし、違和感がないと思う。

委員 A-25:

明日部活動のボランティアの一環でデイサービスに行き、高齢者の皆さんの前で琴を演奏する。高齢者の方に演奏の仕方を教えるなど交流も予定している。人見知りなので一対一は難しいが、集団だと交流しやすい。そういった場をもっと広く設けていけるといい。

コーディネーター:

その集団は学生だと部活動が一番いいか。

委員 A-25:

それがいいと思う。

コーディネーター:

どうすればこのような交流の場をつくれるか。

委員 A-20:

今、人工透析患者の送迎ドライバーの仕事をしている。基本的には自宅送迎だが、最近は家庭の事情で施設に預けられていることが多い。自宅に住んでいた頃は元気でおしゃべりしていた人が、施設に移られると表情が変わってしまい、無口になってしまう方をよく目にする。やはり家族と一緒に生活するのが一番だと思った。私自身、小さい頃は3世代9人家族で生活していた。祖父母と触れ合える場がそこにあった。今の時代核家族化が進み、その場づくりが一番難しい。経験してきた我々が作っていかないといけない。人間は誰も必要とされるから頑張れる。場所や機会をつくり、特技を持つ高齢者をその場につなげていくにはどうすればいいか。人も時間もお金もかかると思う。実際に他で取り組まれている事例も知っていたかからないといけない。みんなが1つになって英知を絞り考えていくことが大事。市と業者が一体となって場の検討会を作ってもらえたらいい。

コーディネーター:

まさに今この場がそのきっかけになっている。

委員 A-14:

祖父母は別のところに住んでおり、接する機会は少なかった。長く入院しており、身の回りのことは病院に任せきりのまま亡くなってしまった。知識がもう少しあれば、もっとしてあげられることがあったのでは、と思っている。

だからこそ、今後はまわりにいる孤独を感じる方を減らすお手伝いができればと思っている。

委員 A-3:

今日の話聞いて、カルチャーショックを受けた。介護はされる方もする方もしんどい大変、という暗いイメージを持っていた。でも、加藤さんの施設は働いている方もサービスを受けている方も楽しんでいて、自発的に取り組んでいこうとされていた。驚くと同時に素敵な施設だと感じた。今の既存施設と何が違うのか。既存施設は決まったことをやっている。でも加藤さんの施設はみんなが自発的に取り組むことに喜びを感じているのだと思う。市内の施設の状況は分からないが、加藤さんの講演を聞いてもらえる機会があるといい。

委員 A-2:

私も加藤さんの取り組みは素晴らしいと感じた。高齢者と地域の子どもがお互いに足りない部分を補い合う関係がいいと私自身思っていたので、まさに理想的なことをされている。交流の場については、色々な制約があるので、まずはできる場所・今ある場所から始めていくことが大事ではないか。

コーディネーター:

加藤さんの施設では、ルールを作っていない。ルールを作らないリスクについてどう考えるか。

ナビゲーター:

「そんなことをして、誰が責任を取るのか。」はよく言われるが、責任は私自身がとる。でも、そもそも「何かある仕事」を我々はしているのではないか。おじいちゃん・おばあちゃんは明日会えないかもしれない。次の瞬間にはしゃべれなくなっているかもしれない。何かあったら困るから寝てください、動かないでください、は、私はケアだと思っていない。「care」の日本語訳は「気にかかる」。語源はラテン語で「耕す」。困っている人にご飯をあげ続けることではなく、一緒にその人の畑を耕して、その人の生活が上手くいくようにすることが「ケア」。それをやっていく事業所をつくっているだけ。

どうして高齢者は、医師や介護職員から勝手にリスクを取り上げられることが当たり前になったのか。そんな権限を付与されているのか。おじいちゃん・おばあちゃんの人生はおじいちゃん・おばあちゃんのもの。映画を観に行きたい、温泉に行きたいおじいちゃん・おばあちゃんを支えるのが私たちの仕事であって、それを止めるのは仕事ではない。

昔から介護事業所は時間で動いている。介護福祉士は国家資格。決まった時間にお茶を出すことは介護福祉士の仕事ではない。目の前のおじいちゃん・おばあちゃんに今何をすべきか考えることができるのが介護福祉士。それを信じてちゃんと動いてもらえる環境が介護事業所。特殊な取り組みをしていると思われがちだが、そうではない。今の標準世帯は高齢者が一人暮らし。30%を占めている。15年後には40%が高齢者の一人暮らし。施設を大量につくっても意味がない。その一人暮らしになっている高齢者をどうやって支えていくのか、を考えないと間に合わないからアパートをつくった。来るべき未来が見えている

のにそこに対しアプローチをせずに、今やっている仕事を続けていくこと、運営してお金を儲けることが正義なら私のやり方は間違っている。それがちゃんとできるということを示して、やりたいと思う人が真似できるような状況を作っていくことがやらなければならないことだと私は思っている。

コーディネーター：

リスクがないことはない。そんな中で実践していけるかが一番難しい。

ナビゲーター：

一番のリスク回避は信頼関係の構築だと思っている。

コーディネーター：

今回は最終回になる。こちらで A 班と B 班から出てきた意見をまとめて提案書案をつくっていく。

その提案書案に基づいて議論していただく。

B 班

コーディネーター：

定野さんの講義を聞いての感想や気になった事例について伺う。

委員 B-20：

全国に高齢者に対しての様々な取り組みがある中で、高齢者に対して参加してもらうための報酬等は市町村よりあるものなのか。うまくいっているケースとうまくいっていないケースがあり、取り組みに広がりを持たせるためには、そのあたりの工夫を確認するべきである。参加する人数が増えることで輪が広がっていくようなことはあると思う。

ナビゲーター：

取り組みが有償か無償かというのは、その自治体やそのサービスの内容によって違う。私の経験の中で、ある学童クラブでは少額をお支払いする有償ボランティアをずっと行っていた。しかし、労働基準監督署からそのボランティアが就労に当たるため賃金を払うように指導を受けたことがある。今ではきちんと雇用して、最低賃金法に基づく賃金が支払われているというケースもある。別のボランティアでは交通費だけ支払う仕組みのものもあり、様々な形態がある。高齢者に話を聞くと、無償で参加することにはあまり前向きでない声もある。額は少なくとも何かそういうものがあると励みになるという方はたくさんいらっしゃるため、そのような仕組みを入れている自治体は多い。もう1つは、活動の中でのけが等のリスクに対

して保険をちゃんとかけてほしいという要望が多く、そういうサポートの方法もある。つまり、無償ではあるが何か事故があったときに補償するというのは、活動するにあたって非常に重要だと思う。

委員 B-10:

昨年度の提案書は内容が充実していると思う。これ以上に何か新たに提案を探し出すというのが難しく感じるというのが正直なところである。この会議に参加されている皆さんは、やはりおそらく市の取り組みに対して前を向こうと思っておられる方々である。逆に参加されていない方をどのようにして繋いでいくのか。何かしようと思うとその参加者に対して保険やインセンティブをつけて参加してもらうような時代になっているのだろう。2、30年前だと、そのようなことは全く関係なく、参加者自身がとにかく自分も楽しもうと様々な地域行事に参加されていた。そのような社会に戻すというのは非常に難しいが、全国での取り組みにも成功例や失敗例が様々にあると思う。その中の好事例をよりよい意味で真似ることが、東大阪市でもこれからやっていく必要があるのかもしれないと思った。

委員 B-22:

全国で様々な取り組みしていることを知らなかったから、知ることができてよかった。

委員 B-7:

高齢者と子どもの居場所づくりとして、全国で様々な方法で取り組みを行っていることを知ることができた。その中でも、子どもが子どもを支援する方法があり、子どもが子どもの相談相手になるという内容があった。子ども同士の支援であれば歳が近くて相談をしやすいので、とても良いと思った。

ナビゲーター:

私の学校の子どもの対象としたアンケートでは、相談相手がいるのか聞いている。小学生は両親と回答するが、中学生ぐらいになると友達と回答されている。子ども同士でのコミュニケーションを通じて、人間関係や宿題の悩み等が解消されていくのだろうと思っている。

委員 B-21:

教科特化型学び合いという取り組みが豊田市で行っていることを知った。特に中学生になると得意教科も出てくる。この取り組みを東大阪でも取り入れたほうが良いのではないかと考えた。

委員 B-16:

結局地域社会が盛り上がっていた古い良き時代が戻ってくれば良いのという話になる。例えば今では近所付き合いが無くなりお互いがお互いを知らない状況である。このような状況をどのようにしていくの

か。また、東大阪市はラグビーワールドカップや朝ドラで盛り上がっているはずなのに、市民はあまり実感していない。市では愛ガードという取り組みがあり、小学生の通学等の見守りボランティアの方々がいる。子どもにいきなり声掛けをするのはなかなか怖いことに感じる。そのため、そのような声掛けをできるメンバーを作り、まずは声掛けの仕方について研修して勉強してもらったほうが良いのではないかと。個人としてではなく組織として大きく地域ごとに広がっていく必要があるのではないかと。思う。

コーディネーター：

おっしゃられた通り、声掛け事案になる可能性もある。今風のやり方で取り組んでいく必要がある。

委員 B-17：

本当に様々な地域の関わりがあった。今後取り組みを行う場合、その結果やアドバイスを収集することができれば、のちに他の地域の方やその世代の参考になるのではないかと。何を目的とするのか、どのような結果を求めるのかを考える必要があると思う。子どもへのアンケートというのは一人一人の話だけでは主観的なものかと思うが、回答者が多いと、何か本来の目的と違ったものも出てくると思う。取り組みの結果を明らかにすることで、次の世代へ繋げることができれば良いのではないかと。また、地域活動ではふれあい祭りが市で有名だが、そのような場に子どもが参加し、何か一つのことをみんなで頑張っ取り組むことで、普段は喋ったことがない友達とも仲間意識ができて、自己肯定感を感じたりすることができると思う。

委員 B-19：

全国で様々な取り組みがあり、放課後サポート教室の活動が気になった。子どもが遊べるような場所が少ないからか、自分の家の周りの道路で遊んでいる子が結構いる。遊ぶ場所がない。安全に遊べる場所があったら良いと思った。

委員 B-13：

小中高生は部活や塾でとても忙しく過ごしているので、休日にわざわざボランティアに行く人は、あまり多くないと思う。学生は友達同士で遊んだりするような時間も求めていると思う。自主的に参加するボランティアで交流を作るよりも、授業とかで交流する機会を作るほうが良いのではないかと。自分が学生の時には、老人ホームへ行って高齢者と交流し、近くの小中学生と遊ぶような機会が授業であった。その授業の中で興味を持った子は友達を誘ってさらに取り組みに参加していくというのが良いのではないかと。思う。参加する側にも無理のない程度に、そのような交流とかができれば良いと思った。

ナビゲーター：

交流のきっかけづくりという面では、社会活動に参加する授業を行っている。例えば老人ホームでお年寄りとお話しに行くだけではなく、老人ホームはどういうところなのか、そこで働いている介護職の方はどのような仕事しているのか、そのようなことも授業の中でキャリア教育として十分取り組むことができる。

委員 B-13：

自分は職業体験の一環として学生時代に老人ホームへ行った記憶がある。そのような交流があると良いと思った。

委員 B-12：

全国でこれだけ交流活動が実施されているということは、やはりそれだけ社会の関心が高い結果であると思う。例に挙げられていた成功例以外にも失敗例について聞きたい。その失敗の要因を知ることによって多くのことが学べると思う。全国の活動の中には、失敗に終わってしまったこともかなり多くあると思う。またこの会議に参加されている方々は興味関心が高いと思うが、関心がない方々をどのように巻き込みながら取り組んでいくのか。ネット社会と言われる中で、SNS等を活用することで、若い人から大人、高齢者まで興味関心を持ってもらうきっかけになると思う。また活動に参加する1市民としては、何か特典やクーポン等がある方が参加するきっかけになる。この会議もクオカードをもらい、参加しようと思うきっかけになっている。その参加者がその後も継続して興味を持続けることができるのであれば、有償で小さな投資をすることで大きな広がりになっていくと思う。今の時代どうしても自分一人生きるのに精一杯な社会なので、なかなかボランティアや人のために動くのが難しく感じられる中、活動のきっかけづくりを工夫できると良いと思った。

ナビゲーター：

経験上、無償ボランティアでよくあるのは担い手がいなくなってしまうことである。担い手不足で事業が実施できなくなった事業はいくつかある。有償である必要がないという方もいる。有償であることで責任が生じると感じてしまうこともある。ただ無償にするとなかなかボランティアが集まりにくいという面もある。事業の継続性がやはり難しい。様々な仕組みを入れていくことが必要なため、町会や自治会、行政が入っていくことは重要だと思う。事業の失敗例はまた探しておく。

委員 B-11：

全国の様々な取り組みの中で気になったのは、子どもが高齢者を支援するパターンの買い物代行サービスの内容である。これはやはりお金の受け渡し等いろいろな問題を含んでいると思う。そのような問題をどういうふう工夫して、サービスを導入できたのかとても気になった。自分が子どもの頃は、自宅にも

あまり鍵をかけておらず、割と簡単に近隣住民ともフランクに会話していたが、現在はセキュリティ等がしっかりしていることも多い。今の時代にどのようにしてこれを成功させたのか知りたい。

ナビゲーター：

今は必ずしも現金で決済する必要はないのでこのサービスを実現しようと思えばできる。決済はネットにて別で行い、商品だけ高校生が持っていく。その方法であれば現金の受け渡しはない。仙台市も実施しており、実施する方法はある。

委員 B-27：

定野さんの話を聞き、貧困とそうでない人とのデータ比較で、貧困の人の方がよりハングリー精神が無いことを知って興味深かった。貧困の人のメリットや強みは何なのかというのが疑問ではあった。昔のシステムや仕組みが良かったという話が出てきていると思うが、今の時代にそれが無くなってきているのは、時代にそぐわないからなのではないか。では時代にそぐわない原因は何なのか。その原因を調べて問題点を洗い出すことで、今の時代に合うシステムインフラを作り直したら、本当に必要であれば元々のシステムや仕組みを復活させることができるのではないかと思った。

コーディネーター：

古き良き時代のシステムや仕組みをどのように今の時代に新しいやり方で実施していくのか。或いはもしかしたらそぐわないものだったらなくなっていくのか。その辺りもぜひ考えていきたい。

委員 B-26：

足立区の事業例を聞き、同じようにできるものがあれば、徐々にやっていくと良いまちになっていくのではないかと思った。今の時代はやはりネットショッピング等もあり便利だが、それを利用した詐欺もあり、怖い時代でもある。いつ被害に遭うかもわからないので、自分自身も気をつけないといけないと感じる。良い社会になってきていると思うが、その分難しい面もある。

コーディネーター：

便利になることで新たな不安も生まれている。

委員 B-24：

自分がやっているのは3つある。1つに小学生の柔道剣道については大阪府下大会までいき、盛り上がっている。2つに退職してから布施支部の警友会に入っている。一番の根本としてはセカンドポリスとしての役割であり警察のバックアップが主な内容である。3つ目に地域サポーターとしての活動である。100

名ほどおり、不安な方はどんどん相談してもらったらよいと思う。ゴルフ、カラオケ、飲み会やバス旅行等をして交流している。仕事としては大阪府交通協会で働いており、安全のことをよく知っている。なんでも相談してもらいたい。

委員 B-23:

東大阪市だけでなく日本全国で取り組みをしていると知った。ただ市の取り組みはすでに市政だよりに掲載していることも沢山あり、市民がもっと一つ一つの取り組みに興味を持ってくれたら良いのではないか。興味関心は一人一人違うが、どのように興味関心を持ってもらうか。東大阪市でどのように資金を作り、どのように活用するのが良いのか。よりよいまちのためには必要なことだが、わからないことも多いのでみなさんの意見を聞いて考えていきたい。

コーディネーター:

一人一人が自分ごと化して考えることができれば良い。どのように周りを巻き込んでいくか考える必要がある。

委員 B-6:

子どもと子どもの交流として、東大阪市の公民館で大学生がこいのぼりを作る教室に子どもと一緒に参加したことがある。そのようなイベントに何度か参加すると、やはり基本的に似たような家族や似たような考え方を持ったような人が参加している。そのような交流の場に参加されない方々をどのように引き込むかというところが、なかなか考えは思いつかず、難しいところだと感じる。自分たちができることとしては、自分が参加している事業に他の家族を誘い、巻き込んでいくことができるのではないかと考えた。また小中高生であっても、大人になっても、やはり人から感謝されるということが1つの成功体験に繋がると思う。子どもの頃から人に感謝されるような体験を積み重ねることで、老後になっても人に感謝されたいという気持ちになり、ボランティア活動等にも参加しやすくなるのではないだろうか。

委員 B-3:

取り組みを実施する場合は定量化したほうが良いと思った。効果がどれだけ出たかについて、そのインセンティブをきっちりとメリットデメリットで比較するべきだと思う。大規模調査のような形で医療費等全て含めて、金銭面で比較してみたほうが良いのではないか。ただアンケートなどは適当に回答してしまう部分があるので、調査の方法には工夫が必要だと思う。今回の会議の参加についても、例えばクオカードの配付が無かったとしてもおそらく自分は変わらず参加すると思う。人が面白いと思うのは、明確に定められない部分もあると思う。継続することも大事であり、人がどう思うかという属人的な要素もあり、両立も難しいと思うが、うまく切り分けてできたら良いと思う。

委員 B-1:

話を聞いて足立区民は意識が高いと思った。ほかの自治体みる機会があるが、東大阪市は窓口で市民と揉めていることが多い。そのような方々にどのようにして広めるか。東大阪市でマイナンバーカードを発行する際、3 日前から予約をして申請するルールになっている。しかし予約なしで長時間待っている市民の方が沢山いた。市の指示通りに来る方もいるが、それ以外の方も沢山いる。そのような情報を持たない方々をどのように引き寄せるのか。またどこまで引き寄せる必要があるのか。最近市内にできたスーパーマーケットでは人が多く集まっており、そのような場所で市の情報を普及するようなイベントを実施すると良いのではないかと。せつかくならば人の集まる場所を把握して利用したら良いのではないかと。

ナビゲーター:

始めなければ始まらない。みなさんが始めたら、それを見た他の方が自分も始めようと行動に移し、だんだん連鎖反応していくのがとても重要である。この会議の根本にあることである。多くの方が関わる事柄が一番伝わりやすい。例えば、ごみの廃棄について、貧富に関わらずごみは出さなくてはならない。そのため、足立区ではごみの破棄については非常に敏感に反応されていた。粗大ごみを出す場合は有料であり、集積所まで持ってくるのに、当時の金額で 3 億円ぐらいかかっていた。有料にした場合でも、9000 万円程しか収入が上がらない。そのため 2 億円以上の赤字であった。どのようにしたかということ、集積所まで持参した場合は無料とした。すると 4 割以上の方が自分で集積所に持ってきた。非常に敏感にそういう情報に反応する区民性がある。使えそうなものを 100 円で引き取るようにした場合は、リサイクル産業が伸びてきている中では、100 円以上で買い取ってもらえることがあるためこれはうまくいかなかった。例えば買い物代行サービスのように、ニーズがあるものであれば市民の方にも敏感に反応してもらえないのではないだろうか。

<第2回会議の意見・改善提案シート 取りまとめ結果について説明>

コーディネーター:

東大阪市で子どもファーストと高齢者のウェルビーイングを実現していくためにどのような取り組みができるだろう。

委員 B-17:

様々な提案があると思うが、子どもあるいは高齢者自身からプレゼン形式で課題に沿った活動やボランティアについて提案してもらうのが面白いと思った。子どもや高齢者からこういう活動やボランティアをしたいという内容をプレゼンしてもらい、東大阪市の中で選んでいく。大変盛り上がると思う。課題に沿った内容で、提案内容に継続性があり、ある程度自主的にできる内容という条件を決めて、最終的に市や市

民で選定していく。自発的に動いた方が物事は進むのでエネルギーも大きいと思う。東大阪市全体で何かそういうことをして盛り上がると良いと思った。

コーディネーター：

子どもたちのプレゼン大会というのがあったとしたらどうか。

委員 B-7：

自分の通う中学校ではソーシャルチェンジというのをやっている。なにか困っている人について自分たちでテーマを決めて、どのように解決していくかということ数を数か月かけて考え、それをプレゼンする。その授業をしているのは東大阪市では自分の学校だけだと聞いている。そのような取り組みを増やしたら子どもたちが自分ごととして社会問題を考えることができるのではないかな。

委員 B-22：

月に1回程度、学校でドリーム集会というものがある。大人の方から子どもの頃の夢を聞き、それを聞いた学生が自分の夢を考える取り組みである。

ナビゲーター：

大人との関わりの機会があり良いと思う。これまで出てきた取り組みについてさらに広げていけるのではないかなと思う部分があればうかがいたい。

委員 B-10：

ソーシャルチェンジの活動は東大阪市の中学校で一校だけ行っているのか。

事務局：

東大阪市の取り組みとして STEAM 教育を行っており、その STEAM 教育の枠組みの中でソーシャルチェンジの活動を行っている。ソーシャルチェンジの授業自体は教育委員会のテーマごとに学校を設定しているか、もしくは学校で授業を構成されている。

委員 B-10：

こども議会というのはどのような内容か。

ナビゲーター：

足立区でも何度か実施したことがある。中学校の代表者がプレゼンをする機会を議場で作り、それに対して行政が答弁するというような機会を設けた。中学生からそのような力を育もうということで取り組みを行っている。実際に様々な意見が出てくるため、それを区政に取り入れるとなると大変時間はかかるが、実際に行ったことはある。全国各地でそのような取り組みをしている自治体も多い。

コーディネーター：

盛岡市では市内の高校生を対象とした高校生議会を行い、実際の市議会の議場で話し合う機会がある。

委員 B-10：

そのような取り組みにより子どもの声を直に聞くというのはとても大切なことだろう。現場の声やその世代の声を直接聞いてもらうことができる組織作りを積極的に展開していく必要がある。高齢者については、社会福祉協議会等で要望を吸い上げ、その結果で合致するものがあれば、子どもと高齢者がお互いに公助・共生していくというやり方もあるのかもしれないと思った。

委員 B-20：

先ほど言われたようなプレゼン大会等のイベントをどのように広めるか考えると、やはり高齢者としては他人の子どもであれ、やはり子どもの言うことは何か響くような気がする。東大阪市ですでに努力されているのかもしれないが、イベントへの周知や参加を誘うようなメッセージビデオ等を作り、市のホームページにアップし当日の会場で放映すると良いのではないかなと思う。高齢者から子どもというよりも、子どもから高齢者の方が何か響くのではないかな。高齢者から子どもに対するメッセージも同じく、SNS 等も使いながら広げていけるのではないかな。そのようなことが人の心を動かして、一度参加してみようと思ってもらうことで取り組みに広がりができるのではないだろうか。

コーディネーター：

どのような取り組みをしていくのか、その上で取り組みに関わる人を増やすにはどうしたらいいのか。前の感想のところでも、ここにいる人以外の人をどうやって巻き込んでいくのかという話もあったため、繋がってくる話だと思った。また、子どもファーストと高齢者のウェルビーイングのためにどのような取り組みができるだろうか。

委員 B-1：

まず高齢者のウェルビーイングという言葉がわかりづらいと思う。英語でまとめようとしてしまうが、その言葉からまずひっかかってしまう。ホームページでの情報発信はある世代までは訴求するが、届かない世

代もあると思う。それをどのようにコーディネートすればよいのか。スーパーでなにかするとしたら物を配れば良いのか。なにか今までやっていない仕組みをやった方が良いと思った。おそらくアンテナを張っている人はみんな見ている。ただアンテナを張っていない人にどのように広げるかというのがなかなか難しい。子ども議会等があったとしても多分自分が子どものときは参加していないと思う。そういう子たちにも引かかるような、何かもう一味加えられると良いのではないかと思った。

コーディネーター：

今回の会議のような形で、急にご案内が来るような、そのような方法もあり得るだろうか。

委員 B-1：

それもいいと思う。この会議で皆さん本当に上手にしゃべられる。皆さんそれなりに意識を持って、日頃考えておられる方が来たのだろう。そうでない人にまで広げるというのが難しい。もう少し俗っぽいやり方を考えた方が良いのかと思う。市の方でやりにくいかもしれないが。

コーディネーター：

どのようなイベントを行うのか、そして巻き込んでいくのか。このようなところがポイントになってきそう。先程、SNSで発信するのは無料とおっしゃっていたが、どういう形でどういう取り組みができるだろうか。そしてそれを巻き込んでいくにはどうしたらいいだろうか。何かお考えあれば、ぜひ教えてほしい。

委員 B-12：

行政のことだけでなく、自分が興味のあることでもないことでも世間一般の情報をどこで得るかということやはりスマホ、SNS、インターネットで見ることが多い。ただ、それに引っかけられない人はある程度の人数がいる中で、定期的に市政だよりやチラシがポストに入ってきたり、地域の掲示板にいろんな張り紙がされていたり、そういう文化はなくならないということは、SNS 等に引っかけられない人たちに対してそれらの方法で発信しないと伝わらないという現状があるからなのではないか。どのように興味や関心がない人、興味があっても知らない人に向けて発信するかというのは、やはり少しずつ地道に行っていくのが一番だと思う。もちろん SNS 等を活用するのが影響は大きいと思う。若い人に刺さると思うし、それが刺さらなくても情報が目に入ることで頭には残って刺激になると思う。100人に発信して、100人に引っかけしてほしいが、それは理想論で難しい。1人でも多く引っかけもらうために紙媒体での発信や地域での声かけ、知り合いから知り合いへの広がり、1歩1歩地道な努力はどうしても不可欠になってくる。子どもファーストについては、子どもは大人へ、大人は高齢者へという流れがある中で、子どもはそのうち高齢者になっていく。それを考えると、子どもたちにはしっかりと教育できる機会が必要である。学校教育だけでなく、例えば今世の中で議論されている103万円の壁や税、投資等のお金に関すること等社会

で生きていく上での知識もしっかり学ぶことができる機会づくりにお金使ってほしい。大人になると自ら学びに行かないと学ぶことができない。子どもは学校に通っているのです、そのような機会を作ってあげてほしい。それも子どもファーストだと思う。

コーディネーター：

情報発信については、大きなところだけでなく、小さなところから様々な方法でコツコツとやっていく必要がある。あと子どもへの教育についてはお金の教育も含めて幅広く教育していくことが大事だろう。

ナビゲーター：

関心のない人をどのように巻き込むかという話が多かった。関心のない人に関心を持ってもらうのはなかなか難しいという話もあった。まず関心を持っている方が始めてみることで、それがバタフライ効果で大きな渦になるというイメージを持った。それと並行して機運醸成や人が集まる場所を利用して発信すること、見える化をすることもとても重要なことだと思う。また、子どもが大人になり大人が高齢者になるから、子どもに種を撒くという話があった。その議題の中では人から感謝される体験や、子どもが社会問題に対して提案するソーシャルチェンジという話があがった。それが実現すると子どもたちももっとやりたいと思うようになる。そういう繋がりができたら良いと思う。それを提案の中に入れてもいいかもしれない。子どもの話をしたが、現役世代や高齢者になる前の現役の方が、なにかを始めるにはどうしたらいいのか。子どもには種まきと言ったが、種を持ってない大人たちはどうすればいいのか意見を聞いてみたい。

コーディネーター：

リスキリングという話もあったが、シニアになってから急になにかを始めるのではなく、現役世代から続けられるようなことはないか。現役世代が子どもファーストや高齢者のウェルビーイングへ働きかけるために、どのような取り組みや働きかけが必要か聞いてみたいと思う。

委員 B-6：

自分は現役世代にあたるが、なかなか難しい。実際自分の家庭を考えるのが精一杯である。個人的な話をすると、一番関心を持つのはお金である。どのように稼ぐかに関心がある。今で言うと NISA や iDeCo 等の確定拠出年金制度や税制の優遇制度について、なかなか知る機会が無く、知っている人だけがやっているところがある。お金の稼ぎ方、税金の下げ方、支出の減らし方について気になる。詳しく教えてくれるような機会があれば、それを利用して将来心に余裕を持つことができると思う。自分のことに余裕があれば、子どもたちのことについてなにか考え、自分たちの老後のことを考えることができると思う。余裕

がなければ人のことを考える余裕がない。なにかを始めるときにどのようにして現役世代もゆとりを持つような形で考えていくかが重要である。

コーディネーター：

衣食足りて礼節を知ると言われる。まずは自分や自分の家庭や家計、そのあたりが落ち着いてきて、地域等にも目を向けられるのではないかと。まずは自分の家庭や家計に関する教育や支援、リテラシーを高めることも大事であるという意見で、とても考えさせられた。

委員 B-27：

皆さんの意見を聞き、子どもファーストと高齢者のウェルビーイングについて真剣に考えれば考えるほど、今すぐ実現するのは難しいと思う。ウェルビーイングというと最初は何を意味しているのかよくわからない。そのような言葉を使っているところが自己満足ではないが、そのような政策になってしまっているのではないかと。本当に伝えたいのであればもっとわかりやすい言葉を使うほうが良い。また今すぐ実現できない場合にどうするか。この会議にも若い子が来てくれたりするが、実際問題どうにもならない。今まだ現役世代でない子どもが今後社会に対して影響力を与えていけるような社会づくりが大事だと思った。例えば、海外で活躍している大谷翔平はすごい影響力がある。彼の影響力があれば人は動く。影響力の中の範囲内でしか人間は動かないと思っている。影響力のある人材を東大阪から育てるためには、一人一人意識を変えて、その周りの人たちの成長を促すことが大事だと思う。お金のリテラシーについては、日本は海外に比べて劣っているが、とても大事な部分だと思う。そういうところに対してのアプローチは貧困の解決にも根本的に繋がる問題でもある。学校でお金の授業等を行い、未来への投資として行っていくことは、一番効果的で本質的な問題解決ではないかと思った。ただ一時的なことだけを考えれば、子どもや高齢者にとってイメージの良い人を誘致して政策のPR活動をしてもらえば、本質的な解決にはならないが一時的な効果は得られるのではないかと思う。

コーディネーター：

影響力やリーダーシップを育んでいく教育に繋がるのかもしれない。子どもファーストと高齢者のウェルビーイングについても、まずは大所高所からいうだけではなくて、その個人のマネー教育なども大事ではないか。そもそもウェルビーイングという言葉がわかりにくい。みんなで進めていきたいのであれば、わかる言葉で話し合わなくてはいけないという意見であった。ふと思ったが、以前働いていた会社の理念で、人生、年を取れば取るほど幸せになるような社会を作ろうと言っていた。現役を退いて年を取れば取るほど、寂しくなるような社会じゃないほうが良い。そういうような言葉はわかりやすいのかと思った。

委員 B-24:

一つの提案として、例えば東大阪市を退職された方に地域の取り組みに参加してもらえると良いのではないと思う。市のことをよくわかっているリーダーがいたほうが良い。高齢者は市のことをよくわかっている人が多い。

委員 B-13:

投資やお金のことを勉強する機会がなく、自分で勉強しようと思わないと勉強できない。そういう勉強会が地域等にあれば参加しやすいかと思う。情報発信というのは、自分で情報を取りにいかないといけないと思う。全員を拾ってあげたいという理想論はあるが、正直仕事においても自分で情報を取りに行くのは当たり前で、興味がない人を巻き込むのは難しい。このように集まっている方、興味がある方、市政だよりを読むのが好きな方、SNS をチェックするのが好きな方、そういう方に最初は興味を持ってもらい、周りを巻き込んでいくしかないと思った。自分は講演会等が好きで、よく家族と一緒にいたりする。ただある程度自分たちで情報をチェックするような習慣がなければ難しい。そうでない方に情報が届かないことはある程度は仕方ない部分もあると思う。

コーディネーター:

まずはアンテナが高い人がそのようなところに関わっていき、ある意味ムーブメントというか、多くの人が関わるようになると、次やその次の人たちも少しずつ巻き込まれていくのではないかとということである。

委員 B-11:

すごく難しい問題だと思っていて、ずっとどうしたらいいのか色々と考えているが、結局お金のかかることしか思いつかない。例えば講演会の中で司会者の方がなにか案内を入れることで PR になるのではないかと思う。何かの事柄に絡めて情報発信をしたり、人が集まるようなスーパーに看板を立てたりする等、何かのついでに目や耳に入るような形にしないと、なかなか自分で情報を集めない人たちに情報を届けるのは難しい。

委員 B-16:

例えば、技術等が要らない誰でも参加できるようなジャンケン大会やカラオケ大会のイベントを地区で地道にずっと行うことで、それが盛り上がると目に留まるようになるのではないかと。

コーディネーター:

1回や2回ではなくて、繰り返して積み上げていく。現役世代を巻き込んでいくポイントかもしれない。

委員 B-19:

プレゼン大会の話があったと思うが、私の学校では自分の好きな企業に思っていることを提案してプレゼンをするキャリア甲子園という機会がある。学校から子どもたちにその内容を伝え、クラスの半数がやりたいと言って多くの人が応募している。市の行う活動だと、1人で行くものが多く参加する際に結構不安が伴うと思う。市だけでなく、学校に向けても積極的に打ち出していくと、不安も軽減されるのではないかと。少し興味がある人も更に関心を持ち、子どもが提案する機会も増えるのではないかと。

コーディネーター:

個人活動するというのはなかなか大変なので、安心して取り組めるように周りのサポートが必要ではないか。

本日は、定野さんのお話を受けてから、どのような取り組みが必要なのか、取り組みに関わる人を増やすためにはどうしたら良いかというような話し合いをしてきた。特に、現役世代を巻き込むという意味では、やはり市のことよりもまずは自分や家庭のこと、このようなところへのサポートも大事なのではないかという話も出てきた。

ナビゲーター:

関心のない人をどうやって巻き込むかという話は出てきており、まとめることができた気がする。その次に出てきたのが、子どもに成功体験を積ませて、やがて現役や高齢者になっていく。感謝される経験や、子どもが提案してそれが実現できるというのはやはり楽しいことである。ソーシャルチェンジやキャリア甲子園という例も挙げられており、例えばそれを市の取り組みとして実施していくことも良いと思った。現役世代について1つ考えたことが、子どもが大人になりたいと思える社会を作るのは現役世代の責任なのではないかと思う。子どもが大人になりたくないと思わないように、現役世代が一生懸命生きるとか、ゆとりを持って生活するだとか、稼ぎ方や投資等の情報が必要だという話に繋がっていると思う。一生懸命生きること、そして関心を持つ人の意見を発信していくことで、子どもがもっと大人になりたいと思えるようになる。これは我々の責任なのではないかと、皆さんの意見を伺って思った。

以上

4.今日の会議まとめ

A 班

1.「あおいけあ」から見えた介護施設のすがた

- ・高齢者に楽しんでもらうのではなく、高齢者が主体となって楽しむにはどうすればいいか、を重視。
- ・認知症の方が持っているスキルや経験を活かし、自分らしく過ごせる環境を提供。

- ・施設内にフリースペース(拠点)を設け、子どもや地域住民が自由に出入りできる場を提供。

(若い世代を呼び込むにはコンセントと Wi-Fi の整備が重要。)

⇒いずれも『発想の転換』が鍵。

2.高齢者と子どもが交流できる場づくりのアイデア

- ・市営住宅や UR 等の利活用。
- ・スマホ教室を開催し、若い世代が高齢者にスマホの使い方を教える。(理解度を高める効果も。)
- ・交流するうえで安心感の醸成や可視化。(腕章の着用やマスクにワンポイントを付ける)

3.分断の解消

- ・高齢者と若い世代、障害のあり・なしで分断が生まれている。
- ・高齢化により認知症が将来的にはマイノリティーからマジョリティーになる可能性がある。
マイノリティー・マジョリティーの捉え方は変化していく。
- ・お互いが交流や接点を持つことで相互理解を深め、共生社会の実現をめざす。

4.リスクについて

- ・どんなことにもリスクは付きまとう。介護も同じ。
- ・最大のリスク回避策は『信頼関係の構築』

B 班

1.どのような取り組みが必要か

- ・実際に行われた取り組み内容から、失敗した原因や改善点、工夫している点を知り参考にする。
- ・目標を定めて取り組みを行って見える化をすることで、今後の取り組みにその結果を生かす。
- ・誰でもわかりやすい言葉で説明し、多くの人に取り組みについて知ってもらう。

2. 取り組みを行う上での課題

- ・古き良き時代と言われる昔の頃とは異なる今の時代に合った方法で取り組みを行う必要がある。
- ・興味や関心を持っていない人に対して、情報提供や参加を促すことが難しい。

3. 取り組みに関わる人をどのように増やしていくか

- ・参加者に対して保険やインセンティブをつける。
- ・参加者がその周りの人たちを巻き込んでいく。
- ・誰かを誘って一緒に参加できるようにする。

- ・SNS だけでなく、市政だよりや地域の掲示板、ホームページ等の様々な媒体を活用する。
- ・人が集まる場所で啓発や情報提供を行う。

4. 取り組みとしてできること

- ・見守りボランティアの活動にて高齢者から子どもへの声かけを行う。
⇒声掛けをできる人がいることで地域ごとの交流の広がりがあるのではないかな。
- ・授業にて学生が多世代交流のできる機会を設ける。
⇒部活や勉強で忙しく自主的に時間を作ることが出来なくても、授業にて交流の場に参加することはできるのではないかな。
- ・授業にて学生がお金に関すること等の社会生活に必要な知識を学ぶ機会を設ける。
⇒子どもが大人になったときに自分の家計や生活にゆとりを持つことが出来たら、地域等にも目を向けることができるのではないかな。
- ・子ども自身がプレゼン形式で取り組みについて提案できる機会を設ける。
⇒成功体験や人から感謝される経験をすることで、大人になった時にも自主的に社会活動等に参加できるような人になるのではないかな。
- ・子ども同士が相談相手になる。
⇒相談しやすい居場所づくりになるのではないかな。

5.事務連絡

6.閉会

<省略>